▲巴写 女将 工藤みよ子　11代目友綱隆登親方

ちゃんこ巴潟
巴潟新聞
平成26年4月1日(火)
発行　工藤みよ子
編集　ちゃんこ巴潟
東京都墨田区両国2-17-6
TEL 03-3632-5600
第009号

明治時代から続く名門「友綱部屋」
11代目友綱隆登親方（元関脇・魁輝）を訪ねて

「ちゃんこ巴潟」の創業者である元小結「巴潟」（本名・工藤誠一）は、立ち合い小さな体で一気に飛び込んでいく姿から〝弾丸〟と呼ばれた力士時代を経て、力士引退後の昭和36年に友綱部屋9代目の名跡を継承しました。入門当時は、小さな体ゆえ稽古場ではなかなか相手にされませんでしたが、人一倍努力し、猛稽古で鍛え上げ、数々の名勝負で人気を博しました。その相撲への情熱は親方になっても冷めることなく、熱の込もった指導によって、多くの名力士を育て上げました。

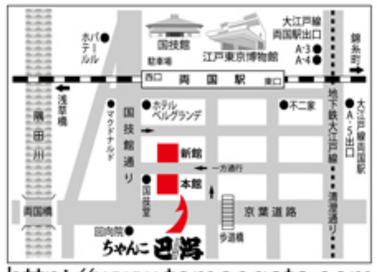
弟子の一人に青森県上北郡の天間林村から来た、弱冠12歳の男の子がいました。少年が友綱部屋の門を叩いたのは、東京オリンピックが開催された昭和39年。西野政章という名の少年は、後に関脇・魁輝として活躍しました。

「ニシ」の愛称で慕われた魁輝は、じっくりと力をつけ、昭和50年11月場所で新入幕。当時の師匠だった9代目友綱親方の定年に間に合いました。右四つ、寄り、突っ張りを得意手とし、昭和54年7月場所では最高位となる東関脇に昇進しました。昭和62年3月場所をもって力士を引退。その後は相撲協会理事や審判部長などを務め、相撲界を支えてこられました。現在は、11代目友綱隆登親方として、友綱部屋の伝統と教えを弟子たちに継承しておられます。

「ちゃんこ巴潟」の開業（昭和51年）にあたり、当時現役力士だった11代目友綱親方は、「相撲一筋の師匠がちゃんこ屋を開くとは思ってもいなかった…」と大変驚かれたそうです。

今回は、巴潟（9代目友綱親方）とは師弟であり、名門・友綱部屋を継承し、長年角界のために尽力している11代目友綱親方に、現役時代のエピソードや巴潟との逸話、親方としての想い、そして、友綱部屋の稽古の様子を取材させていただきました。

巴潟 女将 工藤みよ子　人見一範



http://www.tomoegata.com

両国の見どころ

江戸東京博物館

江戸時代の代表的な都市である江戸と京都。江戸と京都の都市設計を鍵に、アジアそして世界を意識した視点でみつめ、江戸時代の都市を考える展覧会。

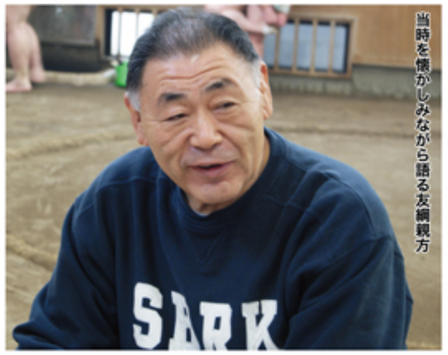
角界に身を投じて50回目の春
自覚を持った「人」を育てていきたい

弱冠12歳で故郷・青森を離れ、友綱部屋の門をたたく

ある日のこと、先生から「西野、いますぐ家に帰りなさい」と言われました。当時、私は小学6年生。先生があまりに慌てていたので、私も急いで家に帰りました。戸を開けると、驚きました。当時引退されたばかりの芳野嶺関（元前頭）が私の家に訪ねて来ていたのです。

小さいときから子ども相撲をしていたので、中学は相撲の盛んな学校へ進学しようと考えていた矢先のことでした。「相撲部屋への入門は中学を卒業した後に」と考えていた両親でしたが、「親方に見込まれたのだから、早い方がいいだろう」と友綱部屋への入門を後押ししました。

昭和39年。私は、12歳で故郷の青森を離れ、単身で東京・両国へ出てきました。青森では体格が大きいほうでしたが、いざ部屋に入ってみると周りは大きな体をした人ばかり。私以外のすべてが関取に見えたのです。「自分はこの世界でやっていけるのか」と不安に思いました。それでも、なんとか耐えられたのは、中学校に通いながら稽古をしていたからです。学校に行くことが、私にとっての息抜きとなっていました。13歳の私には稽古だけの毎日では、とても耐えきれなかったと思います。


当時を懐かしみながら語る友綱親方

相手が横綱であっても怯まず強い気持ちで挑んだ

初土俵は昭和40年11月場所。頑張ろうと張り切っていましたが、その直前に盲腸になってしまったのです。場所中に盲腸が悪化し、急遽休場して手術をしなければならなくなりました。しかも、11月は九州場所です。場所が終わると部屋の仲間たちは全員東京に帰ってしまい、私は病院に一人残されてしまいました。見知らぬ地で、当時はまだ幼かったこともあり、相撲人生の中で一番しんどい時期でした。帰りは青森から親父が迎えにきてくれ、夜行列車に揺られながら、このまま田舎に帰ろうかと考えましたね。

昭和50年の11月場所で初入幕を果たすと、いよいよ横綱との対戦が待っていました。まだ横綱と対戦したことがなかったときは、とんでもなく大きな存在でした。しかし、出稽古で一緒に稽古をするようになってからは、特別な存在ではなく、同じ関取だと思うようになっていました。当時の横綱・北の湖から金星を取ったときはもちろん嬉しかったです。横綱とは結びの一番なので、何よりも自分の取組後にお客様が帰っていくのを見るのが嬉しかったことを覚えています。幕下のときに取組が終わり、部屋に帰ってテレビを付けるとまだ相撲が中継されていたときは、寂しい気持ちでしたからね。

厳しくも愛情の深い巴潟親方相撲を通じて、人としての生き方を学ぶ

巴潟親方は、とても頑固で、物事の良し悪しがはっきりした人でした。親方との思い出を振り返ると、数えきれないほどです。

よく「廻しの取り方は下から〝いただきます〟。上から掴むのは盗人の手。これは人生においても同じこと。謙虚に下から〝ちょうだい〟の気持ちが大事」と言っていました。親方ならではの独特の言い回しですが、廻しを下から掴むと自然と脇が締まる。これが相撲の基本なんです。私と親方は相撲の型が違っていましたので、出稽古で修行してこいとよく行かされましたね。

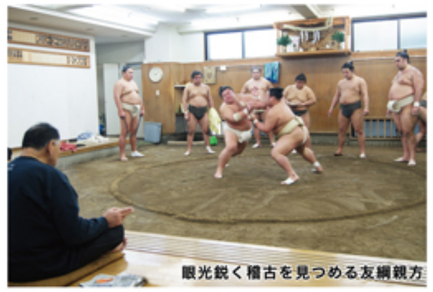
親方に直接稽古をしていただいたのは10年余ですが、相撲のことだけでなく、お客様に対しての接し方など、私の人生の基礎を一から十まで教えていただきました。

●11代目 友綱陸奥親方（元関脇・魁輝）
●初土俵：昭和40年11月場所
●十両昇進：昭和48年9月場所
●幕入：昭和50年11月場所
●引退：昭和62年3月場所
●三賞：敢闘賞1回（昭和54年5月場所）
●金星：3個（北の湖1個、若乃花1個、隆の里1個）
●11代目 友綱親方：平成元年5月場所より現在に至る

力士を育てることは、人を育てることと同じなんです

私の現役時代とは違い、今は厳しくやるだけではついてきません。一人ひとりの性格や個性に応じて、どこまで叱れるのか、耐えられるのかを考え、やる気がわいてくるような言葉を選びます。人として、相撲取りとしての「自覚」を持たせることを大切にし、日々弟子たちと向き合っています。単に強い力士を育てることがすべてではありません。どの部屋も関取だけでは、相撲界は成り立たないことを理解して、支えてくれるすべての人に感謝できるようにならなければいけないと思うのです。

私がようやく幕内に上がれたとき、親方にこんなことを言われました。「まだ付き人は付けられない」。私は、てっきり幕内に上がれたのだから当然付くもの


眼光鋭く稽古を見つめる友綱親方

力士の強靭な体をつくるちゃんこ鍋伝統の食文化を今も守り続ける

ちゃんこは、力士にとって大事な体づくりに一番適した食事です。現代人のように一品ずつ分けて食事が出されると、食べる方は必ず好き嫌いをして食べてしまいます。その点、ちゃんこはお玉ですくった中に嫌いなものが入っていたとしても、一度すくってしまった以上食べなければなりません。たくさんの栄養が詰まったちゃんこを食べることで、より丈夫で強い体が作られていくのです。ただ、最近は残念なことに部屋ごとの伝統の味が無くなってきつつあるのです。

相撲部屋の食事は、昼と夜の2回です。友綱部屋では、365日毎日ちゃんこ鍋を食べることを基本としています。いまでも若い力士が先輩たちのために、ちゃんこ番で当番制にしながら作っています。ちなみに、友綱部屋のちゃんこは、さっぱりポン酢味が伝統です。

私の親方としての使命は、力士としての立ち振る舞い、人としての自覚を持った弟子を育て上げることです。角界に身を置いて、今年で50回目の春を迎えます。これからも国技である大相撲の歴史と伝統を伝え、角界のため、後進の育成に精一杯頑張りたいです。

息つく間もなく続けられる力士たちの猛稽古

今回の取材で、特別に友綱部屋の朝稽古を見学させていただきました。私たちが稽古場に伺った午前9時には、すでに稽古が始まっていました。

稽古場に入ると、水を打ったように静かな空気の中、荒い息づかいと、バチッと激しく体と体がぶつかる音だけが響いていました。

申し合いや三番稽古を黙々と真剣に取り組む若い力士たち。体中を泥だらけにし、厳しい稽古が続きます。そして、関取衆の稽古が始まりました。友綱部屋の4名の関取（前頭／旭天鵬・前頭／魁聖・前頭／旭秀鵬・十両／旭日松）と、この日は尾車部屋の前頭・豪風が出稽古に来ていました。

関取衆が土俵に入ると一瞬にして場の空気が変わり、ピリピリとした緊張感に包まれます。立ち合いの鋭さと厳しさが増し、若い力士たちは真剣なまなざしで見入っています。中には先輩力士に稽古を付けてもらいたいと、何度もお願いする熱心な若手力士もいました。

休むことなく稽古に励む力士たちですが、取組が甘かったり、立ち合いが遅かったりすると、親方から〝気合い入れろ〟、〝脇が甘い〟と厳しい激が飛びます。その一言で、激しい稽古に更に熱が入ります。

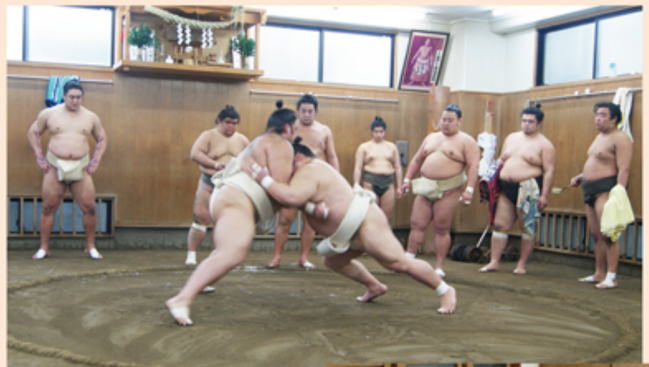
関取衆の稽古が終わると、全員でぶつかり稽古が始まりました。何度も何度も押し込み、力が入っていないと旭天鵬関から激が入り、すり足をさせられます。息づかいも荒くなり、フラフラになりながらも稽古を続ける力士たちの姿を見て、本当に圧倒されました。ここまでやらないと大相撲という厳しい勝負の世界では生き残れないのだと改めて感じました。

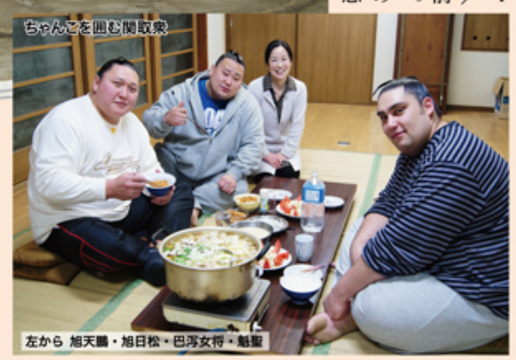
最後に、全員で股割りや四股を踏み、蹲踞をして、神棚に手を合わせると一日の稽古は終わりました。

厳しい稽古に耐え、毎日地道な努力を続ける力士たち。これからの相撲界を担う若手力士たちの勇ましく頑張る姿が大変頼もしく感じました。友綱部屋の稽古を取材させいただいて、これからもっと応援していきたいと思いました。

友綱親方、ありがとうございました。目の前で見る稽古の様子に驚きと感動がありました。また親方時代の巴潟のお話は、私たちが知らない一面が垣間みられたような気がして新鮮な気持ちになりました。

巴潟 女将・工藤みよ子


本場所さながらに繰り広げられる激しいぶつかり合い


ちゃんこを囲む関取衆
左から 旭天鵬・旭日松・巴潟女将・魁聖

●お相撲さんの主な一日

7:00〜11:00	幕下力士の稽古
9:00 頃より関取衆が稽古をはじめる ※稽古終了後に関取衆から順にお風呂	
11:00〜12:30	ちゃんこ（昼食）
13:00〜	昼寝（1時間〜1時間半）
16:30〜	掃除・夕食の準備（幕下） トレーニング（関取衆）
19:00〜	ちゃんこ（夕食）